よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

28

よろこびの知らせ
第 28 集

目　　次

行って、見て来よう …… 1
ルカ 2:8-20

満ち足りた歩み …… 10
詩篇 23:1-6

誘惑に勝つ …… 19
ルカ 4:1-12

多く赦された人 …… 28
ルカ 7:36-43

ここに収められたメッセージは、2021 年 12 月～2022 年 1 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

行って、見て来よう
ルカ 2:8-20

2:8 さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。
2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。
2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。
2:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
2:12 あなたがは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」
2:13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。
2:14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」
2:15 御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」
2:16 そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。
2:17 それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。
2:18 それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。
2:19 しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

　かつては、どこの国でも、王子、王女が生まれたときは、それを知らせる役割の人がいました。英国にもその

ような人がいて、「街角で叫ぶ人」という意味で、「タウン・クライヤー」と呼ばれます。ウィリアム王子とキャサリン妃の間に男の子が生まれ「ルイ」と名付けられたとき（2018 年）、セント・メアリー・ホスピタルの前で、伝統的な衣装を着て、その誕生を告げている人をニュースで見ました。英国王室では、過去の伝統をいまだに守っているのかと感心したのですが、実は、その人は王室とは何の関係もない人で、トニー・アップルトンという、街頭宣伝を職業にしている人だったということを、後で知りました。ちょっとがっかりしましが、かつては、あんなふうにして王子、王女の誕生が伝えられたのだろうと想像することができました。

一、羊飼いへの知らせ（8-10 節）

地上の王子、王女の誕生でさえ大々的に告げ知らされるのに、神の御子イエスの誕生のときには、誰もそれを告げ知らせる人がありませんでした。世界中がこぞって、祝わなければならないのに、祝う人もいなかったのです。そこで神は、天使を遣わし、救い主誕生の「喜びの知らせ」を告げさせたのです。多くの人は、「イエスの誕生のとき、大勢の人が御使いの現れを見、その歌声を聞いた」と思っていますが、じつはそうではありません。御使いが現れたのは大勢の人々がいたエルサレムではなく、もっと小さなベツレヘムの町でした。もっとも、このときだけは、住民登録のために宿屋がいっぱいになるほどの人がいましたが、御使いが現れたのは、ベツレヘムの町の中でもなかったのです。それは町から離

れた野原でした。ですから、救い主誕生の知らせを聞いたのは、野原で羊と一緒に野宿していた羊飼いたちだけだったのです。

神の御子の誕生は全世界に告げ知らされなければならない大きなニュースです。なのに、なぜ、御使いはローマの皇帝やインドの王たち、また、中国の漢王朝の皇帝に現れなかったのでしょうか。御使いが名もない羊飼いたちに現れたのはなぜでしょうか。本来、職業に貴賤（貴い、卑しいの区別）は無いのですが、当時、人々は羊飼いを卑しい職業と見ていました。牧草を求めて転々とする羊飼いたちは安息日を守ることも、神殿の儀式に参加することもないので、律法に適わない人たちと見なされていたのです。いうならば、社会の片隅に追いやられていた人たちでした。

ルカの福音書を読み進んでいくと気づくことですが、そこに登場する人々は、ほとんどが、当時、社会的に軽んじられていた人々です。主の母マリアはガリラヤ地方のナザレの町にいましたが、ガリラヤは、ユダヤでは生活できなくなった貧しい人たちが、新天地を求めた開拓地で、ユダヤの人々からは「異邦人のガリラヤ」と軽蔑されていました。バプテスマのヨハネの母エリサベツは高齢になるまで子どもがありませんでした。当時、不妊の女性も肩身の狭い立場にあったのです。その他、貧しいやもめ、取税人、「ツァラート」の人、足の効かない人、目の見えない人、明日の命もわからない物乞いなどといった人々が福音書には数多く登場します。けれど

も、それらの人々はイエスによって救われています。癒やされています。天に迎えられています。救い主イエス・キリストは、一定の地位や身分のある人、能力や財産を持った人たちだけの救い主ではありません。むしろ、羊飼いたちのように、他の人から低く見られている人々の救い主です。イエス・キリストの恵みからもれる人、イエス・キリストの救いの及ばない人は誰もいないのです。御使いが羊飼いたちに現れたのは、イエス・キリストがすべての人の救い主であることを教えています。

二、羊飼いのためのしるし（11-12 節）

御使いは羊飼いに告げました。「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」（11 節）御使いが言った「あなたがた」は「全世界のすべての人」を指しています。しかし、羊飼いたちはこの言葉を「私たちのために」と受け止めたことでしょう。「誰か他の人のためではない、この私のために救い主がお生まれになった。」そのように受け止めること、それが信仰です。「この方こそ主キリストです。」この言葉に「イエスさま、あなたは私の主です。あなたは私の救い主です」とお答えしたいと思います。

聖書では神を呼ぶとき、たんに「神さま」ではなく、ほとんどの場合、「わが神」、また「わが主」と呼んでいます。英語では “My Lord,” “My Jesus” といった言葉が使われます。「神さま」、「イエスさま」と言うより

も、「私の神さま」、「私のイエスさま」と言ったほうが、もっと神を、またイエスを身近に感じさせてくれます。神は私たち一人ひとりと、「わたしとあなた」という生きた人格の関係を持ちたい、それを深めたいと願っておられます。私たち一人ひとりに、親しく「あなた」と呼びかけてくだる神に、私たちもまた「私の主。私の神」（ヨハネ 20:28）とお答えしたいと思います。

御使いは続けて言いました。「あなたがは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」（12 節）「しるし」というのは「奇蹟」のことです。聖書の奇蹟は、神の愛や救いの力を目に見える形で表したものです。たとえば、イスラエルがエジプトから救われたとき、海が分かれ、イスラエルの人々は、そこにできた道を通ってエジプトの軍隊から逃れました。また、食べものが何もない荒野にいた四十年の間、毎日「マナ」という食べ物が与えられました。こうしたことは、目を見張るような大きな出来事、不思議なことでした。イエスも、悪霊を追い出し、病気を直し、死んだ人さえ生き返らせました。人々はイエスのなさったことを見て驚きましたが、イエスは、数々の奇蹟を行うことによって、ご自分が、まことの神であり、人を救うお方であることを示されたのです。

ところが、救い主が世においでになったことの「しるし」は、なんと、「布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりご」だというのです。自分で自分の身を守る

ことのできない弱く小さな新生児、しかも、清潔な産着を着せてもらい、心地よいベビーベッドに寝かせられるのではなく、ありあわせの布にくるまれ、飼葉おけに寝かせられている赤ん坊が、栄光に満ちた神の救いの「しるし」だというのです。なんとちぐはぐなことでしょう。信じ難いことでしょう。

飼葉おけに寝かせられている赤ん坊のイエス、その姿は、そこにマリアやヨセフがいなければ、まるで、家畜小屋に捨てられた子どもに見えたことでしょう。飼葉おけのイエスは、神の御子が、やがて、ご自分の民から捨てられるようになることを示しています。「飼葉おけ」は「十字架」につながっています。イエスが生まれた「ベツレヘム」には「パンの家」という意味があり、それは、イエスが、旧約時代のマナのように、天から下ってきた「パン」で、私たちを生かすために、そのお体を裂き、私たちに与えてくださったことを示唆しています。

「飼葉おけに寝かせられたみどりご。」それは驚くような「しるし」でも、神々しいものでもなく、小さな貧しいもので、とても神の偉大な救いの「しるし」とは見えないものでした。けれども、それはイエスがなそうとしておられる救いがどんなものかを物語っています。そして、この「しるし」は羊飼いたちにとっては絶好のものでした。もし、イエスが宮殿で生まれたとしたら、彼らはそんなところには行けません。しかし、家畜小屋であれば、彼らも入っていけます。羊を飼う彼らにとって

は、そこは自分たちの領域でした。実際、彼らはすぐに「飼葉おけに寝かせられたみどりご」を探し当てることができました。神は、羊飼いたちに、彼らの手の届く「しるし」をお与えくださったのです。

同じように、神は、私たちにも、私たちの身近にあるもの、普段の生活の中で起こる出来事、また、すぐそばにいる人や家族や友人、さらに、教会で聞く御言葉や証を通して、私たちを教え、導き、励ましてくださっています。神は、今も、私たちに手の届く「しるし」を通して、ご自身を示してくださっています。その「しるし」を見落とさないようにしましょう。

三、羊飼いの応答（15-16 節）

さて、御使いの知らせを聞いた羊飼いたちはどうしたでしょうか。15 節にこうあります。「御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。『さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。』」羊飼いたちは、御使いの知らせに行動をもって応答しました。私たちが救われるのに必要なことは、すべて神がしてくださいました。信仰とは、神がなしとげてくださった救いを受けとることです。しかし、信仰は受け身だけのものではありません。聞いた神の言葉に応え、行動を起こすという面もあるのです。

羊飼いたちは、御使いの知らせをただ聞くだけで終わりませんでした。耳で聞いたことを目で確かめるために「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてく

ださったこの出来事を見て来よう」と言っています。しかも、「すぐに」にそのことをしています。御使いは「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました」と告げましたが、羊飼いたちもまた「きょう」のうちに行動に移しました。夜が開けて、「明日」になってからとは考えませんでした。16節に「そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた」とある通り、羊飼いたちは「すぐに」、「急いで」行動しています。

私たちも、羊飼いたちのように、神のもとへと「急いで行く」者でありたいと思います。イエスは言われました。「来なさい。そうすればわかります。」（ヨハネ1:36）これは短く訳せば「来て、見なさい」（〝Come, and see!〟）となります。神の言葉を耳で聞き、頭で理解するだけでは、神の偉大な栄光やその救いを体験することはできません。信仰の一歩を踏み出してイエス・キリストのもとに向かうとき、神は私たちに、神の言葉が実現するのを見せてくださるのです。

また、羊飼いたちは赤ん坊のイエスを「捜し」ました。そして、飼葉おけの中に見つけました。彼らは、そのようにして、最初に救い主に出会い、救い主を礼拝し、救い主を証しする人になったのです。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（ルカ11:9）これはイエスのお言葉、聖書の約束です。救いを、また、神からの答えを捜し求める者は、

必ずそれを見つけます。私たちも、このクリスマスの「きょう」という良い日に、羊飼いたちがしたように、「行って、捜して」、救い主とその恵みを「見つけ出し」、自分のものとして受け取ろうではありませんか。

（祈り）

私たちの父なる神さま。あなたは、御子イエス・キリストを、力ある者や知恵ある者たちにではなく、弱い者、愚かな者たちに示し、喜びの知らせを聞かせてくださいました。そればかりでなく、私たちにも分かる「しるし」を与えて、「来て、見なさい」と招いてくださいました。あなたが聞かせてくださった喜びの知らせに応え、あなたが示してくださっている「しるし」によって確信を得、今度は、私たちが、他の人に「来て、見なさい」と語りかけることができるようにしてください。救い主イエス・キリストのお名前で祈ります。

満ち足りた歩み
詩篇 23:1-6

23:1 【ダビデの賛歌】主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

詩篇 23 篇ほど愛されている詩篇はないでしょう。6 節しかない短い詩篇です。ヘブライ語ではわずか 50 の単語、英語でも 113 語、日本語では 247 文字で書き表すことができます。最初の 1-2 節を暗記している人は多いと思いますが、6 節全部を暗記して、何も見なくても唱えることができるようになりたいと思います。

一、羊飼いである主

ヘブライ語では神は「エル」あるいは「エロヒーム」で表されますが、それには「力ある者」という意味があって、神の全能が強調されています。この「エル」と組み合わさって、「エル・シャダイ」（全能の神、創世

記 17:1）、「エル・ギブホー」（力ある神、イザヤ 9:6）、「エル・エリオン」（高くあげられた神、申命記 26:19）などと呼ばれます。「エロヒーム」は、創世記 1 章の世界の創造のときに使われており、これらは神が、世界と人間の造り主であり、それらをはるかに超えたお方であることを表しています。

聖書では、「エル」の他に学者たちが「ヤーウェ」と呼ぶ、神の固有のお名前があります。ユダヤの人たちは、神のお名前を直接口にするのは畏れおおいと考え、「アドナイ」（わが主）と読み替えました。このお名前が出てくるところは、一般の「主」と区別するために、英語では全部大文字の “LORD” で表し、日本語では新改訳が太文字の「**主**」で表しています。「エル」という神のお名前が、神が人間を超えた力あるお方であることを表わすのに比べ、「アドナイ」は、神が人間との関わりを持たれるお方であることを表します。「アドナイ」はもともとは、「有ってある者」という意味なのですが、それは主が人のためにいてくださる、人と共にいてくださるということを言っています。

「アドナイ」と他の言葉が組み合わさって、「アドナイ・エレ」（主が備えてくださる、創世記 22:14）、「アドナイ・ラファ」（あなたを癒やす、出エジプト 15:26）、「アドナイ・ムカデシュ」（聖別する主、レビ 20:8）、「アドナイ・シャローム」（主は平安、士師 6:24）などのお名前が使われています。「アドナイ・エロヒム」（神である主、創世記 2:4）、「アドナイ・サボア

ス」（万軍の主、イザヤ 1:24）もよく使われますが、人と深く関わってくださる神が天と地のすべてを造り、治めておられるお方であることを言っています。

神のお名前は、それぞれ、神のご性質を表しています。数多くの神の御名を知ることによって、神がどのようなお方なのかを知り、神を賛美することができます。とくに、「アドナイ」と組み合わさっている神のお名前は、神が、私たちにとってどのようなお方なのかを教えてくれ、それによって、より神をあがめ、神に感謝することができるようになります。この年も、神のお名前をさらに知り、学びたいと思いますが、きょう、新しく覚えたい神のお名前があります。それが、詩篇 23:1 の「アドナイ・ローイ」です。

「主は私の羊飼い」は、ヘブライ語では「アドナイ・ロヒ」（羊飼いである主）です。これは、それ自体が神のお名前です。この部分は「主は私の羊飼いです」というステートメントであると共に、神に向かって、「羊飼いである主よ」と呼びかけている言葉ともとることができます。いずれにせよ、神が「羊飼い」と呼ばれています。これにはどういう意味があるのでしょうか。

昨年、クリスマスのメッセージで、御使いが羊飼いたちに現れ、救い主誕生の知らせを告げたことを話しました。そのとき、私は、当時、「羊飼い」が「賤しい職業」とされていたと言いました。それは、ダビデの時代でも同じでした。その家の羊を飼うのは、その家の最年少の子どもの仕事だったのです。ダビデは、エッサイの 8

番目の子で、羊を飼う仕事は、兄たちによってダビデに押し付けられていました。ダビデは詩篇 23 篇で、ダビデが神を「羊飼い」と呼んだのは、そのときの体験から来ていると思われます。

羊は自分の身を守るものを何も持たない弱い動物です。迷いやすく、決して賢くはありません。羊飼いなしには生きていけないのです。ですから、羊飼いは、羊の一匹、一匹に目を留め、見守り、羊と一緒に野宿するなど、いつも羊といっしょにいなければ、その勤めを果たすことができません。また、羊を狙う野獣と戦わなければなりません。ダビデは、神と人との関係もまた同じだということを、知りました。人は、神なしには、生きてはいけないのです。そして、いと高い神が、そんな人間のために、身を低くして、羊飼いのようになって、人と共におられ、人を養い、守り、導いてくださることを知って、神を「アドナイ・ローイ」（羊飼いなる主）と呼んだのです。

二、羊飼いであるキリスト

旧約で「アドナイ」と記されているところは、新約では、ほとんどがイエス・キリストを指すものとして引用されています。「アドナイ」、私たちのただ中に、私たちと共にいてくださる神、それは、まさに、人となられた子なる神イエス・キリストです。イエスはご自分を「アドナイ」と呼んでおられます（ヨハネ 4:26、8:58）。そして、「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」（ヨハネ 10:11）。イエスははっ

きりと、「わたしこそ、〝アドナイ・ローイ〟である、羊飼いなるアドナイである」と言われたのです。

しかも、「良い牧者である」と言われました。これは、旧約で預言されていたことの成就を告げています。旧約の時代、イスラエルの指導者たちは「牧者」と呼ばれましたが、決して「良い牧者」ではありませんでした。神のお心にならい、へりくだって人々を導かなければならないのに、自分たちの利益になる政治をするだけで、羊である民衆を食い物にしていたのです。神は、この「悪い牧者」たちにこう言われました。「わたしの羊はかすめ奪われ、牧者がいないため、あらゆる野の獣のえじきとなっている。それなのに、わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって牧者たちは自分自身を養い、わたしの羊を養わない。…わたしは牧者たちに立ち向かい、彼らの手からわたしの羊を取り返し、彼らに羊を飼うのをやめさせる。牧者たちは二度と自分自身を養えなくなる。わたしは彼らの口からわたしの羊を救い出し、彼らのえじきにさせない。」（エゼキエル34:8-10）そして、こう約束されました。「わたしは、彼らを牧するひとりの牧者、わたしのしのベダビデを起こす。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。」（同34:23）

イエス・キリストは、神が約束された「良い牧者」です。羊飼いがへりくだった仕事であるように、良い牧者であるイエスも、神の御子であるのに、へりくだって人に仕えました。イエスは、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、

多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」（マルコ 10:45）と言われた通り、ほんとうに羊のためにいのちを捨てた「良い牧者」、「アドナイ・ローイ」（羊飼いなる主）です。イエス・キリストを信じる者は、この、まことの牧者のもとに、その牧場で守られ、養われ、導かれるのです。このお方以上の良い羊飼いは世にはありません。その牧場以上に安全な場所はありません。ですから私たちは、詩篇 23 篇を読むときに、「羊飼いであるイエスさま。私は、乏しいことがありません」と、イエス・キリストへの信仰を言い表し、イエス・キリストをほめたたえるのです。

三、羊飼いによる満足

「私は、乏しいことがありません。」これは、イエス・キリストを信じる信仰が与えてくれる大きな恵みです。聖書は、「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です」（テモテ第一 6:6）と教えています。毎日の生活で、不満ばかり持っている人と、小さなことでも感謝している人とではどちらが幸いか、言うまでもないことです。

しかし、人の心は何によって満たされるのでしょうか。もし「モノ」によって満たそうとしたら、誰も願ったものがすべて手に入るわけではありませんから、いつも不満を感じるようになるでしょう。たとえ、欲しいものを手に入れても、人の心は「モノ」では満たされませんから、満たされない心を満たそうとして「モノ」を求めるようになり、そして失望を味わうという悪循環に陥

るのです。

また、人の関心や注目を求めて、それによって心を満たそうとしても、いつも他の人がふりむいてくれるとは限りません。　多くの人は、自分に関心をもってもらいたくて、人をコントロールしようとしますが、それによって、かえって人からコントロールされるようになります。心の不満度を「くれない度」と言います。「子どもが言うとおりにしてくれない」、「こんなに大変なのに誰も私を助けてくれない」などと、「…してくれない」という言葉が多くなるほど、「くれない度」が高くなり、心が「紅（くれない）」に、真っ赤に、染まっていくというのです。私たちは、何が私たちをほんとうに満たしてくれるのかを知る必要があります。

詩篇 23 篇はどう言っているでしょうか。羊には牧草が、水が必要です。しかし、詩篇は牧草や水が羊を満たしているとは言っていません。「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」（2 節）と言って、牧草を与え、水を与えてくださるのは主である、私たちを満たしてくださるのは「羊飼いである主」なのだと言っています。「主は私の羊飼い」だから「私は、乏しいことがない」と言っているのです。

4 節や 5 節で「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても…」（4 節）、「私の敵の前で…」（5 節）とあるように、私たちの人生の日々は、いつも「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」にいるようなものとは限りません。難しい問題に直面して途方にくれたり、不安に襲われた

り、思わぬ苦しみに遇ったりすることもあります。この詩篇を歌ったダビデの生涯は、若い日にはサウル王に命をつけ狙われ、壮年期には外国の侵略に手を焼き、晩年になってからは息子からクーデターを起こされ、まさに「死の陰の谷」を歩き、「敵」に取り囲まれるような日々でした。しかし、ダビデは「私は、乏しいことがありません」と言いました。ダビデは自分を取り囲むどんな状況の中にも、「主がともにおられる」こと認め、この主が私を守り、満たしてくださると信じたからでした。

さきほど、私は、「私たちは、何が私たちをほんとうに満たしてくれるのかを知る必要があります」と言いましたが、「何」ではなく「誰」と言ったほうがよいでしょう。「誰が、私たちを満たしてくださるのか」、それを知ってください。使徒パウロは、「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。…あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」（ピリピ 4:11-12）と言いました。そして、「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」（同 13 節）と、「どんな境遇にあても満ち足りる」秘訣を明かしています。それは、パウロが「私を強くしてくださる方」と呼んだイエス・キリストご自身です。パウロは、「自分ではできない。けれども、私と共におられるイエス・キリストが、それをさせてくださる。私を満たしてくださる」と言っているのです。どんな境遇の中でも、「私は、乏しいことがあり

ません」と言って、感謝しながら歩むことができる秘訣、それはイエス・キリストご自身です。イエス・キリストへの信仰、信頼です。イエス・キリストを「アドナイ・ローイ」（羊飼いなる主）として人生にお迎えすることが、満たされた人生を歩む秘訣です。

「主は私の羊飼い」、だから「私は、乏しいことがない」のです。イエス・キリストが、私を満たしてくださる。この一年の歩みを、あらゆる良いもので満たしてくださることを信じ、願い、詩篇 23:1 を、心を込めて告白しましょう。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。」

（祈り）

私たちの主であり、父である神さま、私たちの羊飼いとして、イエス・キリストを遣わしてくださったこと、イエスが、迷い、滅びるばかりになっていた私たちを、あなたの牧場に返してくださったことを感謝します。イエスに従う道には山もあり、谷もありますが、良き牧者である主が共におられる時、不安や恐れは、賛美と感謝に変わります。この年も、私たちは主により頼みます。私たちに、主にあて、満たされた信仰の歩みを与えてください。羊飼いである主、イエス・キリストのお名前で祈ります。

誘惑に勝つ
ルカ 4:1-12

4:1 さて、聖霊に満ちたイエスは、ヨルダンから帰られた。そして
御霊に導かれて荒野におり、
4:2 四十日間、悪魔の試みに会われた。その間何も食べず、その時
が終わると、空腹を覚えられた。
4:3 そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この
石に、パンになれと言いつけなさい。」
4:4 イエスは答えられた。「人はパンだけで生きるのではない。と
書いてある。」
4:5 また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を
全部見せて、
4:6 こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなた
に差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと
思う人に差し上げるのです。
4:7 ですから、もしあなたが私を拝むなら、すべてをあなたのもの
としましょう。」
4:8 イエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を拝み、主
にだけ仕えなさい。』と書いてある。」
4:9 また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の頂に立
たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから飛び降り
なさい。
4:10 『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる。』とも、
4:11 『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手
で、あなたをささえさせる。』とも書いてあるからです。」
4:12 するとイエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を
試みてはならない。』と言われている。」

「先生、悪魔の誘惑について話してください」、「地獄について教えてください。」昨年、そんなリクエストをいただきました。聖書は神や神の国について教えるため

に書かれたものですが、悪魔や地獄も実在しますので、それについても書いています。きょうの箇所は、新約聖書でいちばんはじめに悪魔が登場するところです。悪魔はイエスを誘惑しましたが、イエスはそれに勝たれました。ここには、悪魔の誘惑に勝つ方法が教えられていますので、そのこととともに、悪魔の誘惑について学びましょう。

一、福音を語る使命

悪魔はイエスに三つの誘惑を仕掛けました。第一は3節です。「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。」「石をパンに変えて、それを食べ、早速空腹を満たしなさい」というわけです。イエスは、40日の断食を終えたばかりで空腹を感じていましたので、この誘惑はそれと関係がありますが、それは、イエスが空腹を満たす以上のことを言っています。悪魔は、イエスに、「あなたが空腹なように、大勢の人が十分な食べ物がなくて苦しんでいる。自分が救い主だというのなら、まず、人々にパンを与えたらどうなんだ」とチャレンジしているのです。「石をパンに変えてみろ」というのは、イエスに、神の国や罪の赦し、また、永遠の命などといったことよりも、人々が今、現実に抱えている問題を解決するのが先決だと言っているのです。イエスの使命を、人々を神に立ち返らせることから、人々の願望を満たすことへと変えさせようとするものでした。イエスはこの誘惑に「『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある」とお答えになりました（4節）。

イエスは「スーパーマン」として世に来られたのではありません。中国の「仙人」のように霞を食べて生きていたのでもありません。イエスはおなかも空けば、渇きも感じ、疲れも覚えました。私たちと何も変わらなかったのです。イエスは、乏しい者や貧しい者の苦しみを誰よりもよく知っておられました。愛とあわれみのゆえに、空腹の人々にパンを与え、病気の人に癒やしを与えておられます。しかし、パンや癒やしを与えることは決してイエスの第一の使命ではありませんでした。イエスは、食べてもまたおなかが空くようなパンではなく、ご自身を「いのちのパン」として、人々に与えるために、世に来られたのです（ヨハネ 6:35）。

世界の飢餓の原因は食糧が足らないからではありません。この地球には世界 80 億の人々が十分に食べるだけのものがあるのです。ところが、戦争や内乱のために田畑や牧場が荒らされ、地元で食糧を生産できなくなっています。必要なところに食糧を届けようとしても、それが妨げられているのです。それに、一部の国の独裁者たちは、民衆をわざと貧しくしておき、国家権力に服従しないと生きていけないようにして、自分たちの権力を保とうとしています。人々が神に立ち返り、世界が平和にならなければ、飢餓や貧困の問題は解決しません。イエスが福音を宣べ伝えることを第一にされたのは、遠回りのように見えて、じつは、確実に人々の必要を満たすことだったのです。

イエスに従う者たちには、福音を伝える宣教の働き

と、人々の必要に応える活動の二つが命じられています。両方とも大切です。しかし、そこには順序があります。第一は、福音を伝えることです。それを忘れてしまうと、どんなに善い行いに励んだとしても、人々のたましいは救われません。社会も良くなりません。悪魔は、人々に、たましいのことよりも、目に見える豊かさだけに目を向けさせます。イエスに従う者たちにも、福音を伝えるという使命を忘れ、無視し、他のことに熱中するよう誘惑してきます。イエスに従う者は、常に、自分の本来の使命、第一の使命を思い返すことによって、この誘惑に勝利したいと思います。

二、妥協のない信仰

第二の誘惑では、悪魔は世界の国々を全部見せて、「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです」と言いました。これは嘘です。世界は神のものです。悪魔は神を嫌う人々と手をつないで、国々を神から一時的に奪いとっているにすぎません。

ところが悪魔は、この嘘に基づいて、イエスにこの世の権力との妥協を申し出ました。「もし、世界に教えを広めたいというのなら、この世の権力を得て、それを使えばいいではないか。世界中の人々はたちまち、あなたの教えに聞き従うようになるだろう。さあ、私と手を組もうではないか」と、神の力とこの世の力とをミックスするように呼びかけたのです。

イエスは、この嘘を見破り、彼にこう答えました。「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい』と書いてある。」（8節）誘惑に勝つためには、嘘を見破る知恵と知識や洞察力などとともに、妥協のない信仰が必要です。なるほど、この世の権力と結びつけば、キリスト教は世界宗教になるでしょう。けれども、それは、人を救う力を持たない、形ばかりのものになってしまいます。歴史をふりかえると、教会は、最初、この世の権力から迫害を受けても、決して妥協せず、ただ神の力に頼って信仰を守り、福音を伝えてきました。迫害が止み、キリスト教が「国教」になっていったとき、教会に様々な腐敗が生まれました。その腐敗を正すために宗教改革が起こり、教会はこの世の権力と手を切り、ただ神に頼って、福音を語るようになったのです。

私たちは毎週、世界の国々のために祈っていますが、そのビデオでは、多くの国々で、その国に以前からあった宗教の束縛や偽りから救われたはずのクリスチャンが、再びそれと妥協し、福音と呪術とを混ぜてしまい、福音によって人々が変わり、社会が変わっていく祝福を逃していることが言われています。信仰の妥協は神の祝福を失わせます。まことの信仰者は、そうした誘惑を斥け、「主を拝み、主にだけ仕える」信仰を貫きたいと思います。それは、信じる者を祝福するだけでなく、その人のまわりにも祝福をもたらすのです。

三、正しい生き方

第一の誘惑にも、第二の誘惑にも、イエスは聖書から

引用して答えました。それで、第三の誘惑では、悪魔も聖書の言葉を使いました。彼はイエスを神殿の屋上に連れて行って、こう言ったのです。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる』とも、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささえさせる』とも書いてあるからです。」（9-11 節）ここで引用されているのは、詩篇 91 篇の言葉ですが、この詩篇は、神に信頼して人生を歩む者を神が守ってくださることを言っています。高いところから飛び降りても、死なないし、骨折もしないなどといったことは書かれていません。悪魔は聖書の言葉さえねじ曲げます。そうした間違った聖書の解釈から「キリスト教」だと名乗り、聖書を使いながら、聖書とは全く違う教えが生まれたのです。聖書は間違って使われると、人々を救うどころか、かえって人々を迷わせ、人々を救いから遠ざけます。聖書を正しく学ぶことがどんなに大切かが、このことからも分かります。

イエスは、この偽りとこじつけに対して「『あなたの神である主を試みてはならない』と言われている」と答え、悪魔の誘惑を斥けました（12 節）。悪魔は、イエスに、「神殿の屋上から飛び降り、ふわっと着地してみなさい。人々は拍手喝采して、あなたはたちまち人の心を掴むだろう」と提案したのですが、イエスは、人々を驚かせるようなパフォーマンスを拒否しました。そもそも神殿は神を礼拝する場所であり、そこはパフォーマンス

の場ではないからです。イエスは、派手なパフォーマンスをして人々を惹きつけるスーパースターではありませんでした。どんな場合でも、父なる神のみこころに従って、忠実に、誠実に、その使命を果たされました。聖書はイエスの宣教について、こう言っています。「これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる。争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。異邦人は彼の名に望みをかける。」（マタイ 12:18-21）」

イエスに従う者は、このイエスの生き方に倣うべきです。「どんな危ないことをしても神が助けてくださる」などと言って、いたずらに神を試みるようなことをしてはなりません。また、分をこえて自分を大きく見せようとするのも愚かなことです。インターネットの時代になり、YouTube などで自分のパフォーマンスを見せ、それで成功のチャンスを掴もうとする人が増えています。内実よりも「見た目」のほうが重視されるようになり、見せかけだけのものが幅を効かせる時代になりました。誘惑は、人が自分を大きく見せようとするところから入って来ます。

このような誘惑に勝つには、聖書の正しい知識が必要です。それによって偽りの教えをしりぞけることができます。しかし、それとともに、また、それ以上に必要な

のは、信仰によって営まれる正しい生き方です。それがなければ、理性だけでは誘惑に勝つことはできません。人の内側にある罪深い欲望や根深く抱いている、神に喜ばれない感情は、簡単に「理性」という防波堤を突き崩してしまう力を持っているからです。自分が誘惑に弱い者であることを認めて、日々主に頼り、主の恵みの中を謙虚に歩むこと、それが人を誘惑から守るのです。

誘惑に勝利された主は、私たちに、誘惑に勝つ秘訣を教えておられますが、同時に、誘惑に勝つ祈りをも教えてくださっています。それは、誰もが知っている「主の祈り」です。「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」（マタイ 6:9-13）「主の祈り」は、じつに謙虚な祈りです。自分の必要を願う前に、神をあがめています。自分の願いよりも神の国が、神のお心が成ることを求めています。自分のことを願うときにも、欲しい物すべてを並べ立てるのでなく、ほんとうに必要な「日毎の糧」だけを願い求めています。自分の罪を認め、それを悔い改め、神との交わりを願い求めています。「試みに会わせないで、悪からお救いください」と、自分が誘惑に弱いことを認めて、ひたすらに主の守りを願い求めているのです。

「主の祈り」は「祈り」ですが、同時に、キリストに従う者の生き方の「指針」です。人は祈っているように生きるからです。主が教えてくさった祈りを心から祈る者は、主が歩まれたように生きることができようになります。

誘惑に遭うとき、神から与えられた使命を確認し、そこに立ち返りましょう。御言葉によってそれを斥けましょう。イエスが歩まれた生き方に倣いましょう。そして、なりよりも、イエスのもとに逃れ、イエスに頼り、イエスに守っていただきましょう。そこに悪魔に対する勝利があり、誘惑からの逃れの道があるのです。

「主の祈り」をご一緒に祈りましょう。

（祈り）

「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」

多く赦された人
ルカ 7:36-43

7:36 さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。
7:37 すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏のつぼを持って来て、
7:38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。
7:39 イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」と心ひそかに思っていた。
7:40 するとイエスは、彼に向かって、「シモン。あなたに言いたいことがあります。」と言われた。シモンは、「先生。お話しください。」と言った。
7:41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りていた。
7:42 彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」
7:43 シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います。」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています。」と言われた。

日本に名古屋学院という学校があります。1887（明治20）年にフレデリック・チャールズ・クライン宣教師が始めた名古屋英和学校がその前身です。クライン宣教師はこの学校のモットーを「敬神愛人」と定めました。英

語では “Fear God, Love People” です。このモットーは、関西学院（かんせいがくいん）、敬和学園、横須賀学院など、多くの学校でも使われています。西郷隆盛の座右銘も「敬天愛人」でした。九州学院などは「敬天愛人」のほうを使っています。

「神を敬い、人を愛する。」かつての世代の人々は、どの宗教の人であっても、世界には人間以上のものがあって、人はそれを畏れ、敬わなければならないことを知っていました。しかし、今日では、多くの人々が、「目に見えないものは存在しない」という唯物思想に洗脳され、目に見えない神を畏れ、敬うということがなくなりました。そして、そこから、さまざまな不道徳や犯罪が生まれました。唯物思想では人間は他の動物と何も変わりませんから、人を「モノ」と考えます。ですから、そこには「人権」などといった概念はありません。唯物思想の国で、平気で人権侵害が行われるのはそのためです。「神を畏れ、敬う」、このことがなければ、「人を愛する」こと、つまり、人を人として大切にすることもなくなるのです。

一、神の愛

「神を敬い、人を愛する」、これは、マタイ 22:37-39 から取られています。イエスは言われました。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」イエスは、申

命記 6:5 とレビ記 19:18 の言葉通り、「愛する」という言葉を「神を愛する」ことにも「隣人を愛する」ことにも使っています。神を「畏れ、敬う」ということは、私たちにも分かるのですが、「神を愛する」と言われると、「えっ」と驚いてしまします。聖書もまことの神も知らなかったとき、私たちは「神を愛する」などといったことを思いもしませんでした。配偶者や恋人を愛し、尊敬する人に憧れ、家族や友人を大切にし、子どもや孫をかわいがる、そんなふうに神に対して「愛の思い」を抱くといったことは、考えられないことでした。神を軽ろんじると、罰（ばち）が当たると教えられてきましたので、ないがしろにはしませんでしたが、かといって、どこにいるかも分からない神とは、ほどほどにお付き合いしておけばよかったのです。

ところが、聖書には、神が人を愛し、人が神を愛すべきことがいたるところに書かれています。神は単刀直入に、「わたしはあなたを愛している」と言われます。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ 43:4）「わたしはあなたがたを愛している。」（マラキ 1:2）また、「主はあなたがたを恋い慕った」という言葉さえあるのです（申命記 7:7、10:15）。

この神の愛を知った人たちもまた、神を愛し、神を慕いました。神を愛する人たちは「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」（詩篇 42:1）「私のたましいは、主の大庭を恋

い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。」（詩篇 84:2）「私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。」（詩篇 116:1）真心から神を信じた人々は、このように神への愛を言い表してきました。

イエスは、ご自分を信じる者に、「あなたはわたしを愛しますか」（ヨハネ 21:15-17）と問い、彼らの愛が冷えたときには「あなたは初めの愛から離れてしまった」（黙示録 2:4）と叱責されました。こうした言葉は、信仰とは何かを教えてくれます。それは、理論的に神を理解することや、儀式・戒律を守ること、また、善い行いを積み重ねることなどの中にではなく、私たちが神に愛され、神を愛することの中に信仰があることを教えています。このような、神と人との愛の関係を教えているのは、聖書の外ありません。神の愛を目で見て、手で触ることができるほどに表してくださったのがイエス・キリストです。私たちは聖書から神の愛を知り、イエス・キリストから神と人との愛の関係を学ぶのです。

二、神の愛を知らなかった人

さて、きょうの箇所には、この神の愛を知らなかった人と、知っていた人とが登場します。神の愛を知らなかった人とは、イエスを食事に招いたシモンという名のパリサイ人です。パリサイ人たちは、聖書に精通していましたから、「神の愛について語れ」と言われれば、とうとうと語ることができたでしょう。しかし、彼らは、「神の愛」を言葉の上では知っていましたが、実際には

それを体験していませんでした。彼らにとって、自分たちの伝統に従って生活することが、神に愛されている証拠であり、それ以上に神の愛を必要とはしていなかったのです。それで、パリサイ人の多くは、すべての人に注がれている神の愛を教え、それを行いで示されたイエスに反発を覚えていました。

そんなパリサイ人のシモンがイエスを食事に招いたのは、なぜだったのでしょうか。おそらく、善意からというよりは、イエスの言動のうちに批判の口実を見つけようとして、偽善的にしたことだと思われます。そして、イエスを批判する機会はすぐにやってきました。その町で「罪深い女」（37 節）と呼ばれていた一人の女性がイエスの足に香油を注ぎ始めたからです。それを見たシモンは、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」（39 節）と心の中で言いました。「神に選ばれた人なら、こんな罪深い女から香油など受けるべきではない。イエスは、聖なる預言者などではなく、ただの俗人である」と、自分勝手な判断をくだしたのです。

イエスは、シモンの心を見抜いて、ひとつのたとえ話を語り始めました。それは、こうでした。「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを

愛するようになるでしょうか。」（41-42 節）短くて単純な話です。

このたとえ話は、私たちは皆、罪という借金を持っていることを教えています。聖書では罪は「負い目」、「負債」、「借金」として描かれています。私たちは、神に対して「罪」という負債を持っていて、それを払いきれないでいるのです。しかし、愛の神は、私たちの負債のすべてを引き受け、ご自分の命によって、それを支払ってくださる救い主、イエスを送ってくださいました。けれども、シモンはイエスを預言者の一人としか見なしていませんでしたし、この時点では、イエスは預言者でさえないと判断しています。イエスが罪を赦すことのできるお方であることを信じてはいなかったのです。また、自分はこの女のように罪深くはないと考え、罪の赦しの恵みがどんなに大きなものかを理解していませんでした。

イエスはシモンに、「ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるか」と質問し、金貸しについて「愛する」という言葉を使っていますが、実際は、借金を赦してもらったからといって、金貸しを「愛する」人などいないでしょう。「ああ、良かった」と思うだけでしょう。しかし、イエスは、あえて、「愛する」という言葉を使うことによって、自分がどんなに多くの罪を赦されたかを知る人は、罪を赦してくださった方を愛せずにはおれなくなるのだ、と言おうとされたのです。パリサイ人シモンは、自分の罪を正しく見て、それを悔い改め

ることをしなかったので、罪の赦しの恵みを体験せず、神の愛を知ることも、神を愛することもなかったのです。

三、神の愛を知った人

しかし、この女性は、神の愛を知っていました。シモンが金貸しから50デナリ借りていた人だとしたら、彼女は、500デナリ借りていた人でした。もっとも、シモンは、「自分が50デナリなら、この女は5万デナリ、50万デナリだ」と思ったかもしれませんが、彼女は、自分の罪が5万デナリ、50万デナリに相当するほど、大きく、深いものかを知っていたのです。罪の負債が雪だるまのように増えていき、彼女は、自分ではどうにもならない大きな負債にあえいでいました。そんなとき、彼女はイエスに出会い、イエスによって、その罪を赦されたのです。彼女はより多くの罪を赦されたので、より多くイエスを愛する者となったのです。

イエスは、シモンに言いました。「この女を見ましたか。わたしがこの家にはいって来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしがはいって来たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」（44-46節）当時、大切なお客様を食事に招くときには、食卓に案内する前に、汚れた足を洗い、口づけして挨拶をかわし、頭に香油を注ぐ習わしがありました。ところが、シ

モンは、そのどの一つもイエスにしませんでした。しかし、シモンがしなかったこと以上のことを彼女はしました。それは、罪を赦してくださった方への愛の表れでした。

イエスは言われました。「だから、わたしは言うのです。『この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。』」（47 節）シモンのように自分の罪を小さく見積もって、赦される必要を感じない人は、愛することも少ないのですが、この女性のように多くの罪を赦されたことを知っている者は、より多く愛するようになるのです。

世の中で一番美しい光景は、人々が罪を悔い改め、神に立ち返り、神を愛するようになる姿です。ビリー・グラハムやグレッグ・ローリの大きな伝道集会で、人々が次々にステージの前に集まる姿は、いつ見ても感動します。そうしたことは、大きな集会だけでなく、スモール・グループの中でも、また、牧師室での個人的な面談の中でも起こりました。神は、キング牧師やマザー・テレサなど、ノーベル賞を受けるような特別な人たちを選んで大きなことをさせ、それによってご自分の栄光を表されますが、そればかりではないのです。自分の罪が分かった人が悔い改めて、罪の赦しの恵みの中に生き、より神を愛するようになる、そのことを通して、より大きな栄光を表されるのです。

イエスは彼女に言われました。「あなたの罪は赦され

ています。」（48 節）イエスは罪を赦すことのできるお方です。私たちはみな「あなたの罪は赦されています」との言葉を聞くためにイエスのもとに来ています。「あなたの罪は赦されている。わたしはあなたを愛している。」この言葉を聞き、信じ、より多く神を、主を愛する者とされていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、私たちの多くの罪をイエス・キリストによって赦してくださったのに、私たちがあなたやイエスを少ししか愛さないのはどうしたことでしょう。自分の罪がどんなに大きなものだったか、また、それを赦してくださったあなたの愛がどんなに深いものであったかを忘れてしまっているからだと思います。きょう、主が教えてくださったことをよく理解できますように。罪の赦しの恵みを体験し、「主よ、あなたを愛します」と言い表して、あなたをあがめる者としてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。

Penguin Club
www.penguinclub.net